

Imaginary Companion の実態と発達の規定因を探る

キーワード：Imaginary Companion, ファンタジー, きょうだい構成, 遊び, 情動制御

行動システム専攻

川戸 由季

1. 問題と目的

4歳のAにはたくさんのお友達がいるが、そのお友達は我々が一般的に考えるような実際の人物ではない。ぬいぐるみや人形等のお友達もいれば、Aにしか見えないお友達もいる。Aは二歳半ころから、家の中での一人遊び場面において、頻繁に“見えないおともだち”を登場させ、まるで実際の人物がそこにいるかのようにリアルに会話し、その見えないおともだちはもちろんのこと、ぬいぐるみや人形等も一緒に含めて遊んでいるという。さらに、それらの見えないおともだち及びぬいぐるみや人形には、それぞれ年齢、性別の他、やさしい、怒りっぽいといった一貫した性格が付与されているということであった。

この例にあるように、3歳前後の子どもが経験するこのような現象は一般に“Imaginary Companion (以下IC)”と呼ばれるが、その特徴は次の3点にまとめられる。まず第一に、ICは単なるふりのように、実在するものを何かに見立てるといった行為で説明できるものではなく、子どもによって“創造”されまた“想像”されるという点が上げられる。第二に、ICは子どもの日常の中に持続的または断続的に登場するという点があげられる。第三として、ICには子ども自身によって一貫したパーソナリティーが付与され、しばしば意図、欲求、情動等の心的状態が帰属されるという点があげられよう。

しかし、具体的に何を指してICとするかについては、議論が分かるところであった。とりわけ、全く目に見えず、何の見立ての対象も存在しない場合のIC (Invisible Companion: 以下IV)に加えて、もう一つ、ぬいぐるみや人形等の具体的な見立ての対象がある場合のIC (Personified Object: 以下PO)をICに含めるか否かという問題は、研究者によって見解が大きく分かれていた。ICに関する最初期の研究者達は、POをICに含めず、IVのみをICとしていた。しかし、近年の研究者 (Gleason et al., 2000; Taylor, 1999)の間においてはPOをICに含めて考えるのが一般的であるため、本研究においてもPOをICに含め、POとIVの両者を調査対象とした。

ICに関する科学研究を振り返ると、比較的早い段階から注目されてきており、例えば1895年、ヴォストロフ

スキはICが子どもに対して果たす安定した適応的な役割を指摘している。しかし、1930年代初期の多くの研究者達は、実際の追跡データはないにもかかわらず、ICを持つ子どもの後の精神病理学的危険性を指摘した (Burstein, 1932; Jersild, 1933; Svendsen, 1934)。このような状況の中、当時最も早く子どもがICを持つことの適応的役割を主張したのはPiaget (1962)であり、彼はこの現象を子どもの認知発達の本質をなすものと考察した。1970年代に入ってより大規模に資料が収集されるようになり、この現象が考えられていた以上に一般的な現象であり、「正常」なことであるという証拠が増加した (Manosevitz et al., 1973; Masih, 1978; Singer & Singer, 1981, 1990)。しかし、未だICの発達の意義は不明確であり、ICに関して明らかにされていないことが山積しているといえよう。その理由として、ICの研究は他の研究領域 (ふり遊び、想像力、心の理論等) から付随的に生じたものが多く、ICそれ自体を主題とした研究が非常に少ないことが考えられる (Gleason et al., 2000)。近年になってICそれ自体に焦点を当てた研究が生じてきた (Gleason et al., 2000; Taylor, 1999)が、調査方法や調査規模を考慮すると、未だICに関する研究は十分なものとは言えず、初歩的な段階にあるといえる (遠藤, 2000)。そこで本研究では、ICという現象そのものに焦点を当て大規模な調査研究を実施することで、日本人におけるICの実態を把握することを第一目的とした。

第二の目的は、ICに関する個人差 (なぜICを経験する子どもとそうでない子どもがいるのか等の問題) がどのような環境要因に起因して生じてくるのかということの解明にある。Gleason et al (2000)が報告したところによると、ICを持つ傾向が高いのは“一人っ子”か“第一子”であるという。よってICの有無に貢献する重要な要因は出生順位ときょうだい数であると主張している。またUccelli et al (1999)は子ども自身のファンタジーに関連した発話は、それに先行する養育者のファンタジーに関する言及、及び養育者と子どもとのファンタジーに関する発話によって予測されると主張した。またSinger & Singer (1990)は、子どものファンタジーの発展に寄

与するものとして、養育者等の重要な他者によるファンタジー行動のサポートを重要視した。よって子どもが一人っ子あるいは第一子という状況が用意されており、さらに保護者のファンタジー傾向が高いと、保護者は子どもとの関わりの中で創造的な遊びを導入し、ひいては IC の発現につながると推察される。このように IC の発現には、きょうだい構成、保護者のファンタジー傾向、保護者と子どもとの遊び場面における関わり、子どもの想像的遊び等との関連性が指摘されながらも、未だ仮説の段階にとどまっており、実証的に解明されたとは言いがたい。よって、本研究では養育者が好んで実施する遊び及び養育者と子どもとの遊びのスタイル、また養育者自身のファンタジー等に着目し、IC に関する個人差がいかなる環境要因に起因して生じてくるかということを知りたい。

II. 予備調査 IC の質問紙における捉え方を探索するために予備調査が実施された。調査対象は 3 歳 9 ヶ月から 6 歳 9 ヶ月までの幼稚園児の保護者 115 名（男児 55 名、女児 60 名、子どもの平均年齢：5 歳 7 ヶ月）であった。調査は、質問紙によって行なわれた。調査時期は 2001 年 2 月であった。その結果、PO の発現率は 37.3%（男児 25.5%、女児 48.3%）、IV の発現率は 3.5%（男児 1.8%、女児 5%）、PO と IV の両方の発現率は 1.7%（男児 0%、女児 3.3%）であった。しかしこの比率は先行研究に比して低かったため、予備調査の質問紙では IC の概念が十分に理解されていなかったのではないかと考えられた。よって第一研究においては IC 概念の教示の仕方を工夫することが求められた。また予備調査の結果から、保護者のファンタジーにかかわる属性が IC の有無に何らかの関連性を持っていることが想定されたため、保護者のファンタジーに関連するより詳細かつ体系的な項目を案出することが求められた。

III. 第一研究

目的 IC の基本的なデータを収集し、IC の実態を把握すること。IC の個人差を規定する要因を解明すること。

方法 **1. 調査対象** 3 歳 0 ヶ月～6 歳 6 ヶ月の幼稚園児の保護者（98.0%は母親）482 名（男児 256 名、女児 226 名、平均年齢：4 歳 12 ヶ月）、保育園児の保護者 127 名（男児 64 名、女児 63 名、平均年齢：4 歳 5 ヶ月）、計 609 名（男児 320 名、女児 289 名、平均年齢：4 歳 9 ヶ月）

2. 調査方法 F 市内の 7 幼稚園および 6 保育園の職員によって調査用紙が保護者に配布され、約一週間後、回収された。質問紙は 641 名から回収されたが、主に保育園から得られた 2 歳 12 ヶ月までの子どもの資料は、統制化をはかるため分析から除外された（回収率 56.3%、有効回答率 52.8%）。調査時期は 2001 年 6～7 月であった。

3. 調査内容 フェイスシートの後、全員に対して、子どもの遊びや日常の行動についての項目が 14 項目、子どもと保護者との遊び場面での関わりについて 5 項目、保護者のファンタジー傾向について 6 項目、保護者が子どもときの想像的遊びへの嗜好性について 6 項目用意され、それぞれ全く当てはまらないから非常によく当てはまるまでの 7 ポイント評定で構成された。続いて IC の概念が提示されたあと、PO、IV それぞれに関して典型的なストーリーが提示され、その後 IC の経験の有無を問う項目が用意された。子どもが IC の経験がある時には、IC の発現時期と期間、IC それ自体の特徴、子どもと IC の関わり方、保護者の IC に対する感情及び態度を尋ねる項目が用意された。IC 経験がない時には、子どもが IC を持っていた場合の感情について尋ねる項目が用意された。

結果と考察 まず IC の発現率であるが、PO のそれは 41.6%、IV のそれは 8.6%であった。次に被験者は IV あり群、PO あり群、IC なし群のうちのいずれかに分類されたが、その際 PO と IV の両方を持っている被験者（30 名）は IV あり群に含まれた。それぞれの人数は、IV あり群 52 名、8.6%（男子 12 名、女子 40 名）、PO あり群 221 名、36.4%（男子 90 名、女子 131 名）、IC なし群 334 名、55.0%（男子 217 名、女子 117 名）であった。この結果は大変意義があるだろう。というのも、先行研究は、全てインタビューによって行なわれたため、少数かつ限定された範囲内からしか情報を収集することができなかったと考えられる。よって、そのデータの信頼性を疑わざるを得ないが、本研究では、質問紙調査という方法を取り入れたため、より大規模かつ一般的なデータを収集することが可能となった。このような大規模な調査においても、4 割以上の子どもが IC を経験しているということが明らかとなったのである。よって IC を持つことは考えられていた以上に「正常」かつ「一般的」な現象であるといえよう。

1. IC そのものの特徴 IC の年齢に関して見てみると、PO の年齢が子どもよりも年下である比率は男子が 58.8%、女子が 75.9%と最も多かったのに対し、IV においては子どもと同年齢であった比率が、男子が 58.3%、女子が 66.7%と最も多かった。このことから、PO は子どもよりも年下であり、一方 IV は子どもと同年齢である傾向が高いと考えられる。次に IC の性別に関して、男児は男子の IC、女児は女子の IC を持つ比率が最も高かった。よって IC は子どもと同姓である傾向が高いと推察される。また IC は、子どもが他人と共にいる時ではなく、“家の中”で“一人”でいる時に一番多く登場する傾向にあった。

子どもが IC を持つ期間について、その平均が求められた。PO について、男児は 2 歳 8 ヶ月～3 歳 9 ヶ月、女児は 2

歳9ヵ月~3歳10ヶ月であった。またIVについて、男児は3歳0ヶ月~3歳10ヶ月、女児は2歳10ヵ月~3歳11ヶ月であった。一般的に3歳前後の約一年間、子どもはある特定のICを一貫して持ちつづけているということが見出されたといえよう。この結果は大変興味深い。なぜなら、ICは3歳前後に経験される(Taylor,1999)という指摘はあるものの、それがどのくらいの期間経験されるのかという問題は、未だ解明されていないからである。本研究における大規模な質問紙調査によって、子どもは“一般的に”約一年もの間、特定のICを持ちつづける、ということが見出された。よって、ICに関して新たな証拠が付け加えられたといえよう。しかし、その一年の間、ICはどのくらい一貫性があるのかという問題は、未だ解明されたとは言いがたく、今後縦断的に検討を重ねる必要があるだろう。

2. ICに関する子どもの観点と保護者の観点

ICに関する子どもの観点 子どもはPO・IVそれぞれに対してどのような態度を示すのだろうか？統計的分析を行なった結果、POに対しては世話をする子どもが多く、IVに対しては対等に接している子どもが多いということが見出された。よって、概して、POと子どもの関係は垂直的な上下関係であり、IVと子どもの関係は対等な、平行的な関係であると推察された。

次に子どもがICを持つきっかけについてPO・IVそれぞれについて検討された。その結果、POに関しては「大人の真似をしたかったから」というきっかけが多かったのに対し、IVに関しては「遊び友達が見つからない」、「一人で寂しい」といったきっかけが多かった。よってIVに関しては子どもが一人で過ごす“時”と“場所”がきっかけとなってIVの発現に影響していると考えられよう。

ICに対する保護者の観点 ICを持つ子どもの保護者(IVあり群・POあり群)と子どもがICを持たない保護者(ICなし群)との間で、ICに対して抱く感情に違いが見られるのだろうか？この点を検討するために、PO,IVそれぞれについて①ICに対して恐いと感じる傾向、②そうっと見守ろうと思う傾向、③誰かに相談しようと思う傾向、④面白そうだと思う傾向、⑤ICに対して特に興味はないと思う傾向、という5点に関して3要因の分散分析が行われた。その結果、①や③といったICに対する否定的な感情はICなし群の保護者が持ちやすく、④のような肯定的な感情はICを持つ保護者が持ちやすいということが見出された。また、ICを持っている保護者の中でも、POあり群の保護者はPOに対して、IVあり群の保護者はIVに対して、より肯定的に捉える傾向にあった。

3. ICを持つ子どもの個人差を規定する要因

出生順位、家族構成はICの有無に貢献するかというこ

とを検討するため、各項目に関して χ^2 検定を行った結果、一人っ子、あるいは一人っ子状況に限りなく近い子どもがICを持つ傾向にあった(Fig 1)。よって「子どもが一人で過ごす“時”と“場所”が用意されている」ということがICの発現に寄与する重要な要因であると推察される。しかし先行研究で指摘されている“第一子”の要因はICの有無に貢献していなかった。

また保護者に関連して『保護者のファンタジー傾向』を測定するために6項目、『子どもの遊びへの積極的参加度』を測定するために5項目準備された。それぞれの信頼性係数を測定したところ0.83, 0.69であった。よってこれらの合成得点を算出し、ICの有無との間で分散分析を行なった結果、ICなし群よりもPOあり群の保護者の方が、ファンタジー傾向が高く(Fig 2)、子どもの遊びに積極的に参加する傾向にあるということが見出された。

さらに保護者のICの有無が子どものICの有無に貢献するかということを検討するため、 χ^2 検定が行なわれた。その結果、ICを経験していた保護者の子どもが、ICを持つ傾向にあるということが見出された。

子どもが日常的に行なっている遊びとICの有無には関連性が認められるだろうか？これに関して全部で14項目用意されたが、意味的に重なりあるものが存在すると考えられたため、因子分析を行なったところ、3因子解が妥当であると判断された。このときの累積説明率は45.69%であった。これらの3因子はそれぞれ『創造的遊びの嗜好性』『アニメに対する嗜好性』『一人遊びの嗜好性』と命名され、これらの各合成得点とICの有無(IVあり群、POあり群、ICなし群)との間で分散分析が行なわれた。その結果、ICを持っている子どもの方が創造的遊びの嗜好性が高く、また一人遊びの嗜好性も高かった。

以上の結果から、子どもには、一人っ子であるというような、一人で過ごす“時間”と“場所”が用意されており、その上保護者自身のファンタジー傾向が高いと、保護者は子どもの遊びに積極的に参加し、創造的な遊びを行なうようになり、その結果子ども自身も創造的遊びを好んで行なうようになり、最終的にはICの発現へとつながる可能性があることが推察された。

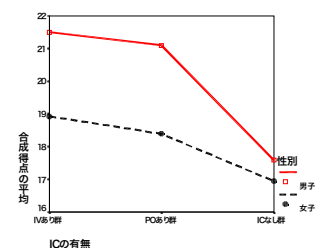
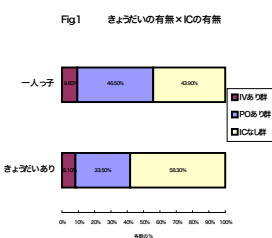


Fig 1 ICの有無 × きょうだいの有無 Fig 2 保護者のファンタジー傾向

IV. 第二研究

目的 IC を持つ子どもに直接インタビューを行なうことで、IC に関するより詳細かつリアルな情報を収集し、IC の実態を別の角度から解明すること。

方法 31 名の子どもとその母親に対してインタビューが行なわれた。そのうち PO を経験した子どもは 22 名、IV を経験した子どもは 19 名であった（男児 9 名、女児 22 名、平均年齢 4 歳 9 ヶ月）。被験者は第一研究の際、インタビューに承諾して下さった 198 名のうち、ここ半年の間に IC を持つ経験があり、かつ、ある程度一貫して IC を持ちつづけていた子ども及びその保護者が選ばれた。調査時期は 2001 年 11 月から 12 月であった。

結果と考察 1.PO と IV の特質 PO の年齢は例外なく子どもよりも年下であったのに対し、IV は赤ん坊から年上まで幅広く存在していた。また IV の特例として、魔法を使える例、動物の例、移行対象が IV に移行した例など、第一研究では捉えきれなかった様々な IV が発見された。

2. IC を経験する時期 31 名のうち 20 名の子ども（64.5%）は、幼稚園就園前の遊び友達がほとんどいない時期から、就園後の、まだ園に慣れていない時期に、IC と最も頻繁に関わりを持っていた。このことから IC は人間関係を補償する機能を果たしていると推察されよう。

3. IC を経験する状況 子どもが家の中に一人である時という報告のほかに、トンネルに入った時など、恐れを抱かざるを得ない時にも多く出現するという報告があった（8 件）。よって、IC は淋しさ、幼児期の恐ろしさ、大人や年上の子どもに対する弱さに直面するときの補償的要求を満たすためにも出現すると考えられよう。

4. IC の消失理由 実際のお友達と遊ぶようになるにつれ IC との関わりが減少したという理由が最も多かった（10 件）。また IV に関してのみ、遠くに行ってしまった、さらに全く覚えていないというケースも報告された。

5. 共有された IC と秘密の IC インタビュー時の態度により、子どもは共有された IC を持つ群と秘密の IC を持つ群に分けられた。秘密の IC を持つ子どものインタビュー時の態度は、母親のひざの上で泣き喚き、常に乳房を触る等、退行のような行動が見られたが、共有された IC を持つ子どもにはそのような行動は見られなかった。なぜこのような違いが生じるのだろうか？これに関して統計的な分析を行なった結果、共有された IV を持つ母親は IV に対して肯定的であり、一方秘密の IC を持つ母親は、IV に対して否定的な傾向にあるということが見出された。よって、母親の感情は子どもの IC の出現スタイルに関与すると推察される。即ち、母親が IC に対して肯定的である時、子どもは IC を他者と共有し、逆に母親が IC に対して

否定的である時、子どもは IC を秘密にする可能性があると考えられよう。また、母親は全く気づいていないが、実は子どもが秘密の IV を持っているというケース（3 件）も発見された。このことから、第一研究において IC なし群に分類された中に、潜在的には IC を持つ子どもが存在していた可能性があるということが推察された。

統合的議論 最初に、本研究の目的に立ち返ってみよう。本研究の第一の目的は IC の実態を把握することであった。第一研究によって 3 歳前後の一年もの間、4 割近くの子どもの IC を経験しており、子どもは PO と垂直関係に、一方 IV とは平行関係にあるということが見出された。また保護者が IC に対して否定的である場合、子どもは IC を秘密にして経験している可能性が示唆されたため、実際には、第一研究で捉えられたよりも多くの子どもが IC を経験している可能性があるという推察された。第二の目的は IC の有無の個人差を規定する要因を解明することであった。重要な要因として、一人っ子であるということ、保護者のファンタジー傾向、保護者自身の IC の有無、子どもの遊びへの積極的な参加、子どもの創造的遊びの嗜好性等が挙げられた。このことから、子どもが一人で遊ぶ“時間”と“場所”が提供されており、さらに保護者のファンタジー傾向が高いと、その結果として子どもとのかかわりの中で積極的に創造的な遊びを行い、ひいては子ども自身も好んで創造的遊びを行なうようになり、最終的には IC の発現へとつながる可能性があるという推察された。

また IC の機能的側面に着目すると、子どもは実際の遊び友達が存在せず、一人でいる時に IC と関わりをもって点や、寂しい時あるいは怖いという感情を喚起させる状況で IC を出現させるという点を考慮すると、IC は人間関係を補償する機能を果たしていると考えられる。また、IC の機能からすると、移行対象との関連性が理論的に想定されたため、本研究においてもこの点に関して検討された。しかし移行対象と IC との関連性は見出されなかった。よって、IC は移行対象の延長線上に捉えることができるものではなく、全く別の発達の要因に起因して生じる可能性があるということが示唆された。即ち、両者とも子どもの情動を制御するという機能を果たしているものの、移行対象は直接の感覚刺激を介した低次のエモーションレギュレーターとして、一方 IC は表象を介した高次のエモーションレギュレーターとして機能していると推察された。本研究により IC に関してより明らかにされつつあるが、今後さらに精緻に検討する必要があるだろう。

参考文献 : Taylor, M. (1999). *Imaginary companions and the children who create them*. New York : Oxford University Press.